住区基幹公園におけるパークマネジメントに関する研究紹介

中部・北陸ブロック　玉野総合コンサルタント㈱ランドスケープ課
則竹登志恵（名古屋工業大学大学院工学研究科博士後期課程）

仕事の傍ら、昨年度より名古屋工業大学大学院にてパークマネジメントに関する研究に取り組んでいます。現在私が研究対象としているのは、注目されやすいまちなかの公園や大規模な公園ではなく、住宅地にある街区公園など、私たちの生活に一番身近な公園である住区基幹公園です。昨年度の研究の中で、全国の事例の中から住区基幹公園で地域住民が主体的にパークマネジメントを実践しているグッドプラクティスをいくつか抽出し、公園の運営管理に関わっている方々や、その公園がある自治体担当者の方などにヒアリングを実施し、身近な小規模公園におけるパークマネジメントのあり方について考察しました。その研究概要の一部をご紹介します。

１．研究の背景

現在都市公園では、行政の他、市民や事業者など多様な主体が関わりながら運営管理が行われており、経営的な視点にて、限られた予算や人材で、公園緑地が有する資源や機能を十分に活かし、効率よく最適な効果を得ていく「パークマネジメント」の発想が重要視されています。また、シビックプライドの醸成や、人々のサードプレイスの場として、都市公園に市民が当事者として積極的に関わり日常的に楽しく過ごす場としていくことは都市が持続し豊かになっていくために必要なことである、との認識が広まり、市民による公園の利活用に向けた取り組みが求められています。実際に建設コンサルタントとしての受託業務においても、これまでの公園緑地の計画や設計に加え、公園における官民連携検討や市民協働による組織づくりなど、公園整備後のマネジメントまでを業務範囲とするものが増加しています。しかし、都市公園の市民参加の特性として、周辺の土地利用、地形、環境、有する資源などの条件や関わる人々が公園毎に異なるため、整備手法が定まらず、それぞれの現場において手探りで進められている状況です。

そのため、本研究では、近隣住区に一定のバランスで配置される住区基幹公園の運営管理について、身近な都市公園に適した運営主体、必要な条件や制度など、押さえるべき視点の共通性や模範となる点を見出し、良好なパークマネジメントのために優先的かつ重点的に取り組むべき要素を明確にしたいと考えました。

２．研究の目的

都市公園が有する多様な機能は、都市公園が良好な状態で保全され、有効に利活用されることでより発揮され、人々の豊かな暮らしを実現します。しかし、私たちに最も身近な都市公園である住区基幹公園（街区公園、近隣公園、地区公園）は、全国に９万２千箇所と設置数が多く、財政難、人材不足、維持管理の負担増大など、危機的状況にある行政だけでは、すべての都市公園を常に良好な状態で運営管理することが困難となっています。

昨年度の研究では、住区基幹公園を対象とし、地域の人々が自ら地域のニーズに合わせて自由に使える都市公園の利活用の実現を目指して、地域が主体となったパークマネジメントの一方法を明らかにすることを目的としました。

３．グッドプラクティスの調査

研究のための調査として、実際に住区基幹公園において、地域の市民が主体的に運営管理活動を実践している事例を良好な事例である「グッドプラクティス」として選定し、組織の代表者へヒアリングを実施しました。更に、選定した事例の都市公園がある自治体の担当者にもヒアリングを依頼し、行政側の場で行っている取り組み内容についてヒアリングを実施しました。また、市民と自治体の中立的な視点から課題等を把握するため立、地域の市民による運営管理を支援している中間

表-1　ヒアリング調査概要表【市民運営組織

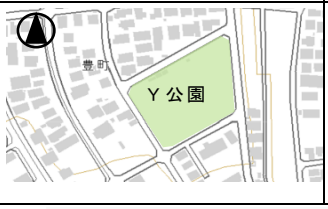
番　号	市民運営組織①	市民運営組織②	市民運営組織③
組織名	Ｙ町自治会(公園プロジェクトＹＴＫ)	Ｓまちづくり協議会	Ｅ地区公園愛護会 ・Ｔローズガーデン
日付	2017/8/31	2017/10/24	2017/11/27
場所	沼津市	名古屋市	横浜市
種別	街区公園（4,300 ㎡）	街区公園（4,700 ㎡）	街区公園（4,600 ㎡）
活動の概要	・自治会内に公園利活用に取り組む「公園プロジェクト YTK」を発足し、毎日ラジオ体操、花壇での野菜栽培等を実施 ・自治会設立以来、会員全戸で輪番により毎日トイレ清掃するなど、自治会行事（防災訓練、一斉清掃、秋祭り等）の場である公園を地域で大切に維持管理	・地区内の環境整備協力費を活用し、中心部にある公園を核に、課題別の５つの部会で地区の魅力・にぎわいづくり、暮らしやすい地域づくりの活動を実施 ・公園での夏祭りやイルミネーション、公園再整備構想 WS などを開催・運営	・利用者の少なかった公園を地域の憩いの場に再生しようと考え、公園愛護会、自治会等と協力してバラの名所を実現 ・助成金等で活動資金を自ら得て毎年フェスティバル、勉強会、芋煮会、剪定会などバラ育ての活動を通じた地域交流、維持管理を実施
位置図			

表-2　ヒアリング調査概要表【中間支援組織】

番　号	中間支援組織①
組織名	特定非営利活動法人　岡崎まち育てセンター・りた
日時・場所	2017/11/10（金）　・　岡崎市
種　別	街区公園２箇所（1,700 ㎡、5,400 ㎡）、 近隣公園１箇所（19,500 ㎡）
活動の概要	・岡崎市の新たな制度である公園運営組織の設立を目指して試行活動中 ・定期的に公園利活用ミーティングを開催し、Ｒ公園は小さい子供の安全な遊び場、広い芝生広場のあるＳ公園では８月に花火イベント、樹林地等が残るＯ公園では樹林地管理やアジサイ等を育てるガーデナーの養成講座を開催
位置図	

表-3　ヒアリング調査概要表【事例のある自治体】

番　号	自治体①	自治体②	自治体③	自治体④
自治体名	岡崎市	沼津市	横浜市	名古屋市
日　付	‘17/11/10	‘17/11/30	‘17/12/18	‘18/1/11
都市公園数	240 箇所 （H28 度末）	160 箇所 （H28 度末）	2,669 箇所 （H28 度末）	1,456 箇所 （H28 度末）

支援組織にヒアリングを実施しました。

また、先行的事例調査として、研究対象に近い条件にて地域の市民による主体的な運営管理を先行的に実践している都市公園や、これらの取り組みを促進する新たな制度を実施している自治体を選定し、取り組んでいる運営管理に関する資料等を収集し、内容の検証を行いました。

これらの結果から、居住系地域を中心とする身近な都市公園に適した運営管理の手法や成功要因、必要な要素、条件、体制、取り組むべき課題などの要素を網羅的に抽出することとしました。

実際にヒアリングを行った組織と自治体は左表の通りです。

４．住区基幹公園におけるパークマネジメント手法のポイント

ヒアリングを実施した結果、良好な事例にはいくつかの共通点があることがわかりました。そして、それらは住区基幹公園において地域住民が主体的にパークマネジメントを実践していくための重要なポイントではないかと考えました。以下に挙げる取り組みが、主な共通点を整理したものです。

①地域のまちづくりと一体となった都市公園の運営管理

調査を行った事例の多くが、公園のことだけでなく、身近な都市公園での活動により地域を良くしていこうという強い思いで取り組んでいました。また、身近な都市公園を地域課題の解決や対処の場として活用しており、良好な地域主体の運営管理を実現していました。

②地縁組織をベースとした市民運営組織の制度改革

全国の住区基幹公園は自治会や町内会，公園愛護会により維持管理されている実績が大変高く、公園愛護会は自治会や町内会に関係する地縁組織で結成されている事例が多いことがわかりました。しかし現在の自治会や町内会等の地縁組織は多くの課題を抱えており、現在の地縁組織に新たな役割を追加する発想ではなく、より良い形態への制度改革、見直しが必要であると考えます。

③中間支援組織の活用

まちづくりを担う NPO 法人などの中間支援組織は、日々の相談や許認可に関する事務手続きのお手伝い、話し合いのコーディネート、経理処理、活動資金獲得のアドバイスなど、自治体職員では対応しきれない部分を補うことが可能であり、中間支援組織に地域による都市公園の運営管理の支援を任せることで、自治体の負担軽減、地域への柔軟な対応や活動支援が可能となると考えます。

④活動の理解・支援につながる情報戦略

都市公園の魅力の他、運営管理目標、活動目的などを、広報やホームページ、SNS、新聞、情報誌等を活用して広く情報発信し周知とＰＲを行うことは、利用の促進や公園への愛着を育むとともに、活動の認知度と理解を高め、地域や企業からの協力や支援につながります。

⑤明確なコンセプト設定とマニュアル等の策定

活動のコンセプトやビジョンを明確にしておくことで、場当たり的なニーズ対応に陥ってしまうことを回避でき、活動の適正の判断基準ともなります。また、管理運営の活動計画，作業メニュー，手続き，手順などを整理したマニュアルなどの策定なども重要です。

以上が昨年度に取り組んだ研究の概要の一部であり、現在もこれらの調査結果を踏まえながら、新たな視点での検討を進めています。

仕事や家庭とのバランスを取りながらの作業のため、なかなか思うように進められていませんが、引き続き調査・分析を進め、地域が主体となったパークマネジメントに活かせる手法を整理し、住区基幹公園での良好なパークマネジメントの実践に関わる方々に役立ててもらえるような研究成果をまとめていきたいと考えています。

ニューヨークの公園 2018 年

東京ブロック　　山﨑誠子（日本大学短期大学部・GA ヤマザキ）

2018 年 8 月 15 日から 9 月 13 日までの 30 日間、大学の視察研修でアメリカの 5 都市とカナダの 2 都市をめぐり、公園や自然、建物とその外構を視察調査してきました。アメリカ本土を訪れるは 30 年ぶりで、その時は東京農業大学造園学科の近藤光雄先生が主催した、アメリカのアトリウムの視察で（この成果が書籍『アトリウムと緑化』1990 年出版）、日本はバブル末期、アメリカは不景気でニューヨークも物騒でした。12 月末から 10 日間でニューヨーク→ダラス→ロサンゼルスと周り、日本に帰国してから二日後に平成と年号が変わった思い出深い視察旅行でした。30 年ぶりのアメリカは一人旅となりましたが、明るく、安全で観光客だらけで、スマホのおかげで、地図やガイドブックをほとんど広げることなくスムーズに公共交通機関を利用して移動することができました。30 年前には思いもつかないことです。沢山見てきたので、書きたいことは山ほどあるのですが、今回は公園のことについて書きます。

この視察の最大の目的はニューヨークの緑化事情、特に「ハイライン」の見学、それとポートランドの街全体の環境への取り組みを見ることでした。

ニューヨークの公園といえばセントラルパークです。過去に 2 回行っていますが、一人でゆっくり見たのは今回が初めてで、地形の起伏を改めて感じ、岩盤な土地だと実感しました。マンハッタン島は 1 枚の大きな岩盤でできているため超高層の建物を建てられるのです。写真を見ていただくとわかりますが、公園内の緑地部分で景石のように岩盤が露出しているところが多くあります。夏休みであったこともあり観光客、バケーションを楽しむ人が多くいました。

↑セントラルパークの岩盤が景石の効果を出している部分

次の公園は、ブライアントパークです。非常に荒廃していた公園を民間の仕組みを使って再整備、活用が行われ、ニューヨーク市民の憩いの場所となっています。パークマネージメントのお手本とされているところです。夏休みの最中でもありますが、本当に人が多った。公園とはゆっくりするところと思いたいですが、ほとんどショッピングセンターのフードコートの様相。

↑ブライアントパークの木陰も人が沢山

さてメインのハイラインです。

↑ハイラインの案内図

ハイラインは全長2.3kmのニューヨーク市にある線形公園で、廃止されたウエストサイド線と呼ばれるニューヨーク・セントラル鉄道の支線の高架部分に建設され、1993年に完成したものです。ニューヨーク市はもちろん民間支援者から資金援助が今もあります。公園は通常、市民の楽しむものであまり観光客はいませんが、年間500万人以上が訪れる観光地になっていました。

↑屈折点に設置されている見晴らし広場

観光地としてなぜ成り立つか、なんといっても眺望があるからです。摩天楼を縫うように緑豊かな空間がつづきますが、直線だけでなく、曲がったり、とどまったり、見下ろしたり、建物内を突き抜けたりと、徒歩ではありますが、ディズニーランドのアトラクションのように風景と体験が変わっていきます。植栽は人工地盤とは思えないほど、多様な顔を見せていました。放置されていた時に自然に

↑床が盛り上がってベンチになっています

育っていた植物を生かした植栽構成となっており、ボランティアが積極的に手入れを行っていました。ストリートファニチャーも工夫されており、舗装やデッキ、手すり等と一体となったデザインです。ハイラインのような公園をそのまま日本にもってくるには予算や管理で大変ですが、企業や市民からの援助で公園を運営することは非常に有効で大事であると感じました。

まだまだ、書きたいことはありますが今回はここまでで。またシンガポールのように皆さんで一緒に行きたいですね。

今回一番おどろいた光景。美術館内はペットOK
ニューヨーク近代美術館のゴッホの絵の前